

Title	史學科秋期旅行記
Sub Title	
Author	西原, 俊二(Nishihara, Shunji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.12, No.4 (1933. 12) ,p.147(727)- 152(732)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19331200-0147">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19331200-0147</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 史學科秋期旅行記

第一日(十月十四日)

今秋の本塾史學科見學旅行は十月十四(土)十五(日)兩日に互つて、水戸、筑波山方面を廻つた。一行は伊木先生に實地指導を仰ぎ、占部、橋本、間崎、松本(芳)、松本(信)、今宮の諸先生及び學生は高山、坂本、高橋(礦)、保坂、高橋(誠)、三橋、西原の諸君、凡て十四名であつた。朝上野驛に集合し、午前七時四十分發の汽車に投じた。二三日前より降り續きの雨が懸念されたが、幸ひ當日は早朝少し降つたのみにて、水戸に着く頃は晴れ渡つた氣持のよい秋日となつた。この日、時事新報朝刊に、高山君の赤外線による古文書鑑定法發明の記事が大きく載せられてあつたのは、同君は勿論のこと、本塾史學科のために誠に欣ぶべきことであつた。十時十九分水戸市着。驛頭より直ちに宿の自動車三臺に分乘して、先づ下市の吉田神社に到つた。高い石階を上ると、老樹鬱蒼として、古社の感が深い。延喜式、那珂郡の名神大社であつて、祭神は日本武尊と云はれてゐる。拜殿の額に、三行に、「大太神樂、第三宮、百萬度祓」と見える。境内なる社司阿久津氏を訪れると、明日祭禮があると云ふことで、混雜中であつたに拘ら

ず、古文書其他の社實を拜見することができた。文書は四卷、吉田神社に關する下文の類がその主なるものである。元來、吉田社の社職は吉彌侯氏、後、小槻氏であつたが、更に文永二年、大舍人忠恒を以て、本社(の田所職とした。後の祠官、田所氏は即ちこの後裔である。爾來、社領日に多く、徳治元年には百五十八町六反の神田があるに到つた。従つて同文書は鎌倉時代のものが最も多いのであるが、久安、仁平の年號も見えて、平安朝の末頃に廻つたものも存してゐる。一卷の初は萬葉假名を交へた祝詞、宣命體のもので、同社の由來を述べてゐるものである。仁平元年、國司留守所よりの下文があり、降つて建久、正治、建仁、建曆、建保、承久から更に降つて、建長、文永、正應、嘉元等の年號が見え、元徳、元弘となつて、南北朝時代に入つてゐる。下文の内容も勿論色々であつて、例を挙げると、正治三年六月廿二日のものは二箇條あり、一は年貢の絹をさし上げること、二は從來四五月の頃、運上してゐたが、以後四月より三期に分けて運上せよと云ふのであり、建保五年には造營用途の御料米に良いものを用ふべしと命じてをり、或は神領内罪人の取扱方は關東御式條(貞永式目)に依るべしと命じ、或は役夫工米廿一石を徵集すべきことを命じ、或は又地頭が年貢を抑留せしを本所より訴へたるもの等があり、其他補任の下文、神社造營に關する下文、太政官符、廳宣、寄進狀などが多く存してゐる。鎌倉時代に於て、社領が相當廣大なものであつたことが推察される。同文書の寫二冊、并に吉田社文書目錄一冊がある。又、江戸時代に及んでは、水戸義公が篤く當社を崇敬し、本殿、拜殿、鳥居其他を造營し、日月の鉾、四神

の旗及び吉田社の社印を鑄て、之を納めた。その四神の旗其他の事柄に關する義公自筆の文書が數通存する。社印は方一寸五分許りの銅印で、「吉田宮印」と刻されてをり、一方の側面に「源光圀置」の銘がある。前記古文書中に吉田宮印の印が所々に捺されてあるが、この古印に摸して、義公が造つて納めたのであると云ふ。尙又同文書中、文書とのつぎ目に小さな印があるが、これは義公が大日本史編纂に際し、文書整理のための檢印であると云ふことである。其他に義公下賜の幡二旒がある。一は虎を描き、一は朱雀を描く。長い布片の末端は數條に分れ、古いために破れ傷んでゐる。以上の觀覽を了へ、阿久津氏の厚意を謝して、十二時半、吉田社を辭し、自動車にて常盤公園へ行つた。常盤公園は偕樂園と呼ばれ、水戸烈公の設けた所である。烈公は尊王攘夷の急先鋒として、幕末に一世を率ゐたが、又一面國內の政治にも意を注ぎ、或は弘道館を開いて文武の道を勵まし、或は偕樂園を設けて士民と遊樂を偕にしたのである。公園横の入口に車をすて、園内に歩を移せば、此處は名高い梅林である。花時ではないが、亦一種の風趣がある。茶店に休憩し、直ちに附近の好文亭に入る。位置、規模等、全て烈公の規劃になつたと云ふが、その造作に頗る意を凝らしたことが窺はれ、他に多く類を見ない、變つた好建築である。階上を樂壽樓と云ふ。南面八疊の正室より俯瞰すれば、前面には田圃が擴がり、左手には的磔たる千波湖が目近く望まれる。眺望開闊、園内の人工の美と田野湖水の自然の美とよく調和して天下の名園と云ふを憚らない。好文亭を出で、再び茶店に戻り午飯を喫し了り、園内東方に當る彰考館へ行く。時に一時半。彰

考館は徳川公爵家の文庫で、大日本史の史料を始め、幾多の貴重書が珍藏せられてゐる。藏書凡て七萬餘冊と云ふ。義公明曆三年修史の業を始め、その全く完結を告ぐるに到つたのは明治四十一年で、その間實に二百五十年の歲月を費した。義公以來、殆ど一藩の力を傾注してこの成功を見たのである。初め史局を江戸に設け、更に水戸にも置くこととなつたが、その彰考館と云ふのは社預の左傳序、彰往考來の語より採つたもので、義公自筆の額は同館内に掲げてある。館長雨谷毅氏の案内によつて、同館を一見し、館前の一室に於て所藏の一部を拜見した。

一、獨逸兵書、寫本十二冊 *Kriegsbuch Wilhelmni d' Loehri* (ノイセン士官學校の教科書として用ゐられたものを、寛政十二年頃、和蘭の日本への賄賂として寫されたもので、銅版になはず計畫であつたと云ふ。原本は之を焼却したが之と同様のものが伯林大學にも在る由。一見、筆にかゝるとは思はれない程、精密を極めた筆寫である。)

一、蘭獨字典 (白河樂翁公以來、傳寫したるものと云ふ。)

一、常陸國誌、全 (義公の筆著)

一、大日本史初稿 (草稿は佐々宗淳、朱にて添削してゐるのは、安積澹泊の筆と云ふ。稿末に「元祿十年十一月廿六日校閱畢」とある。)

一、大日本史卷一、百五十七、列傳八十四 (紀傳の終稿である。天保元年、藤田東湖廿四五歳頃の筆稿であり、彼が壯時の筆力觀るべきである。)

一、刑法志稿 (藤田一正の筆)

一、西山眞翰左傳系 (義公苦學時代の書卷)

一、修史始末、完 (會澤正志の筆)

一、Note (オランダ語對譯)

以上のものに就て、雨谷氏は夫々説明し、且つ所謂水戸の朗讀なるものを聞かしてくれられた。悠々うたひ出されたのは「借樂園記」の一節であつた。正聲即ち聲をとゞへることをその方法とするのである。水戸學の精神の聲に發したるものか。雨谷氏等の實行せられつゝある新水戸學運動なるものは、この水戸學朗讀を以て、精神修養法の全部に非ざるも、重要な部分とするものであるらしい。一時間餘にして、此處を辭し、女子師範の新井氏に案内せられて、西に隣接してゐる常盤神社に參拜する。境内に烈公の用ゐたと云ふ徑四尺七寸餘、長さ六尺餘の陣太鼓(公自筆の銘あり)や、太極と名づくる烈公鑄造の大砲や、火藥壺(三個、小は元祿二年、中は寶永元年、大は寛保三年の銘がある)などが安置してある。此等を一覽して、先きの好文亭に近い借樂園碑を見る。碑身高さ八尺三寸、幅八尺の平石。烈公の撰文で、書も亦烈公の筆。碑面は「天有日月」の借樂園記が刻せられ、碑陰には禁條六箇條が刻せられてゐる。斯て車を駐めてゐた公園入口に戻り、再び自動車に搭じて、水戸市内を走り、途中城址の一部である舊弘道館に車を停める。正門は舊水戸城の大手橋と對してゐて、稍、勾配した坂の上に在る。大手橋の下の濠は水が無くなつてゐるから、非常に深く見えて一層よい。舊城の面影の最も濃く残つてゐる所である。門を入ると、すぐ弘道館の大玄關が見える。豪壯な建物で、肅然たる感がする。烈公が藩士の子弟を教育する爲め、

天保十二年に開いたもので、義公以來連綿たる水戸學の精神は此處で涵養された。館後に八卦堂がある。有名な「弘道者何、人能弘道也」の文を刻した弘道記碑の碑閣である。撰文、書共に烈公の筆になる。其他、鹿島神社、孔子堂などがあり、烈公自書の歌碑、要石や種梅碑がある。園内殆ど梅樹であるが、種梅碑はその梅を植えた由來を述べたもの。園内を一巡した後、午前に訪うた吉田神社に近い藥王院へ行つた。山門を入つて、正面が藥師堂、右に新しい本堂、庫裏がある。當院は延暦年中、桓武天皇の勅願に依て草創すると傳へ、天台宗で神宮寺と云ひ、吉田社の別當として、江戸氏、佐竹氏、水戸家と代々領主の歸依が淺くなかつたので、寺門大いに繁盛し、輪奐の美を極めたが、明治の火災のため、その大半を焼失した。多少の史料を藏してゐないかと期待されたのであつたが、殆ど記するに足るものを存しなかつた。境内も亦、一木一草凡て荒廢落莫の感が深い、さすが林泉の配置などから、往時の盛觀が偲ばれる。住職の方に案内せられて藥師堂に到る。大永七年の造營と云ふ七間四面の廣い堂内も今は全く荒廢し、塵に埋もれて薄暗い。桓武天皇勅額と傳へられるものがある。「吉田山藥王院」とあり、別に小さく「前天台座主二品親王尊鎮書之」と見える。又棟札は「貞享五年二月十五日、大檀那水戸源府君諫議羽林金吾大將軍光圀公」と讀まれる。堂の正面より左側の厨子には寛永七年作と云ふ佛像が三體安置せられてゐる。本堂を出る。其の横手の墓地に鈴木石見守の墓と稱する五輪塔が一基存する。附近に日本武尊東征當時の武將の墓と稱される古墳がある。と聞き、住職の案内で田畑の間を抜けてゆくと、間もなく一

民家の傍に、「史蹟吉田古墳」の標札が立つてゐて、塚の上は雜樹が茂つてゐる。所有者たる農家に乞うて、蓋戸を開けてもらひ、蠟燭の光をたよりに匍匐して入れば、石槨の内部は存外狭く、奥壁に裝飾的文様のものが認められる。内務省史蹟調査報告によれば、これらの彫刻は矢筒、刀子、鉾の武器類ではないかと思はれる。石槨は地表より稍々低く位する例に屬するものであつて、金環、鐵鏃などが出土したと云ふことであるが、とにかく、この種の彫刻を施したものは關東に類のないものであり、この點に於て注意すべき古墳である。斯て一同は又自動車に投じ、秋の夕日を後に受けつゝ、大洗街道を六反田の六地藏寺へ向つた。街道に車を残し、村路を辿ること數町にして達した。寺は俗に六蔵寺とも云ふ。眞言宗の古名刹である。參道を挟んで、老杉鬱蒼たる間を抜けると、正面が本堂で、右手に六地藏堂がある。住職を初め、村人達が早くから色々支度してゐて下さつたのに、晩く伺つたのは誠に濟まないことであつた。一室で茶菓の饗應をうけ、本堂で彫しい寺寶を拜見した。そのうち幾分を舉げると、弘法大師一代繪卷(十卷)、經論義軌類(五十八箱)金剛胎藏兩界曼陀羅圖(支那製、根來寺より來つたもの、年代不明なれど、相當古し)弘法大師畫像(足利時代か、頗る優秀なるもの)十二天尊像(古代名畫)靈元法皇御筆御歌、其他七八百年前製燒物、紀州根來寺より傳へたる剃髮用盥、日本製膳(年代古し)埴輪、板碑(元□二年二月の銘がある)などがある。この時、既に暮色蒼然として迫り、曼陀羅繪圖の如きは、本堂の椽側に掲げて拜見し、或は堂内で電燈の光をたよりに觀覽する始末であつて、一々仔細に點檢する餘裕

がなかつたのは遺憾であつた。最後に地藏堂で六地藏尊を拜し、住職栗原隆興師等の厚意を謝して同寺を辭した。時に午後六時。街道まで、夜道を住職始め提灯を以て送られたのは氣の毒であつた。車は一路大洗へ疾驅し、今夜の宿なる魚來庵に着いた。この日、一行に遅れて立たれた占部先生も既に參着して居られた。一浴後晩食の際は今宮先生の御世話で名物安中の磯節あんちゆうなどに一日の疲を慰し、太平洋の怒濤を聴きながら、一同、枕に就いた。

## 第二日(十月十五日)

浪の花散る大洗の夜は明けた。眞赤な大きな旭。三々五々、海邊を散步する。朝食後、八時前に宿を出る。先づ國幣中社、大洗磯前神社に參拜する。それより自動車にて、附近松林中の常陽聖徳記念館に到る。明治天皇御騎馬の尊像が安置してある。陳列の維新志士其他の記念品拜觀は時間の都合で割愛した。これと隣接して、かの血盟團事件で一躍有名になつた護國堂がある。境域は寂然としてゐて、ひとり「蒙古擊攘云々」の高札のみが天を仰いで悲憤慷慨してゐるやうに立つてゐる。これより愈々、自動車にて水戸へ出で、更に一路茨城街道を疾驅して石岡へ向ふ。石岡は舊國府の地で、常陸國分寺趾がある。下車して之を踏査する。今の國分寺は藥師堂が本堂になつてゐて、その境内と之に接する宅地との部分が昔の常陸國分寺趾の境域である。今礎石の存するのは金堂址と講堂址である。勿論、舊態をそのまま存してゐるわけではなく、殊に金堂址に於て然りで、大半或は失はれ、或は移動されてゐるが、現在の礎石の配列狀態から建物の規模、間隔が略々推知される。礎石は四五尺程の大きさがあり、金堂礎石は本堂に

接する薬師庭園に十個程存し、講堂礎石は約十四五間隔てた檜林中に廿個程存してゐる。さうして、今仁王門址の礎石の在る部分が中門址に略々概當すると云ふ。此處から西北約七八町隔つた國分尼寺址へ行く。附近は桑などの畑地であるが、國分寺と異り、周圍に眼界の遮るものがないから、門址、金堂址、講堂址が瞭然としてゐる。各々の土壇は芝地となつて、柵がめぐらしてあり、大きな礎石が歴然として残つてゐる。講堂址は礎石の数が最も多い。これら礎石の状態で、その境域も略々想像できるやうであり、大體に於て、その規模は僧寺、尼寺何れにしても、さして大きなものでなかつたと思はれる。附近には布目瓦の破片が多く發見されるが、やはり當時使用のものであらう。實際の調査は内務省史蹟調査報告に精しく出てゐる。石岡町の通りから少し右に入つた所に常陸總社神社がある。前途を急ぐので、鳥居の前から拜しつゝ、車を急がせて筑波町まで數里の道を走らせた。秋の山々が車窓から美しく見える。小田町あたりからは既に筑波山の秀容が眞近かである。だが、その双楯は雲に隠れて見えない。小田城址も時間の都合上、割愛することにした。北條の町を経て、筑波驛に着いた。今宮先生の御親戚谷口氏が待つて居られ、余等一行のため、種々斡旋の勞をとつて下さる。山を稍々上つた所に在る筑波の町に着いたのが十一時半であつた。旅館山水莊で午飯を終り、一同登山する。筑波山神社は其處から少し上つた所に在る。祭神は伊弉諾、伊弉册の二神である。山は名に負ふ關東の名山、神社も延喜式以來の古社であるから、社殿も立派で、四時賽者の絶えないのも尤もである。社掌、駒井忠成氏宅に特に陳列せられたる

社寶を拜觀する。主として徳川將軍に關するものが多い。それはもと當社の別當に知足院と云ふのがあり、有名な同院の隆光が將軍綱吉の寵任を得たと云ふ因縁などに因るものであらう。寶物の主なるものを列擧すれば、後陽成天皇宸筆、後水尾天皇宸筆、天地開闢筑波神社懸軸、(嵯峨宮御筆)小松宮彰仁親王御筆、徳川綱吉和歌短冊、卅六歌仙詩歌帖、筒天神御自畫、清明上河圖(清國夏芷筆)百工圖(筆者不詳、諸職人の圖繪)粉色草花繪(筆者不明)百壽圖、菅公像(足利時代か)林和靖像(徳川光貞筆)六歌仙帖(土佐内記筆)諸冊二神額(嵯峨宮御筆)三十六歌仙額(三十六面)吉宗作太刀(徳川家光寄進、國寶)徳川家繼見臺、文臺并硯箱、奏紋高蒔繪硯箱、金梨子地硯箱(二個)堆朱食籠、黒地金蒔繪辨當箱、唐金猫足火鉢、黃朱菓子盆(徳川綱吉母桂昌院寄附)小田成治所用軍配團扇、徳川家康所用軍配團扇、知足院光譽所用團扇、和鏡、以上の觀覽を終つて同所を辭し、ケーブルカーで山上へ登る。先づ男體山の頂上を志し、巖壁を攀ぢて絶頂の祠に達する。濃霧濛々漠々。登臨の快を恣いまくにすることはできなかつたが、盛んに霧の流るゝ間からちらりと麓の秋色や霞ヶ浦の水の色さへ鮮かに見えた。男體山を下つて、女體山に上る。同じく山顛の巖上に小祠がある。この日は恰かも日曜のことゝて、山は登山客が陸續として賑ふ。再びケーブルカーにて下山。旅館の前より自動車で筑波を發し、田間を西に疾驅して下妻町を過ぎ、四時五十分、大寶に著く。老樹鬱々たる下に大寶八幡宮がある。人家が近いが物寂びた古社である。祭神は譽田別命、足仲彦命、息長足姬命で、大寶元年藤原時忠が宇佐八幡を勸請したと傳

へる。本殿は桃山時代の流れ造、特別保護建造物である。興國年間、北畠親房が關城に立籠つた時、共に賊兵と抗戦したのがこの大寶城で、八幡宮邊の岡山が即ちその城址である。今も猶ほ土壘の名残を認めることができる。勿論、後世の完備した所謂城の觀念を以て觀るべきではなく、謂はゞ土壘の上に櫓を設けた程度のものに過ぎなかつたらうが、この當時の城廓の特色として天險を利用することには頗る意を用ゐたのである。當城も東西北の三面は崖であり、下は今新田となつてゐるが、これは享保十一年の開發に成つたもので、その以前は一面の沼であつた。即ち名高い大寶沼である。社殿の東北に當城で忠死した贈正四位下妻政泰の碑が建てられてあり、また武藏の平林寺にあつた嘉慶元年十一月十三日銘の古鐘が社務所の傍に置いてある。この外、大寶沼から出た丸木舟もあると云ふことであるが、何分、時刻切迫の爲め、見るを得ず、豫定してゐた關城址も漸く社背から北方に望見するに止め、遺憾ながら今回の見學のコースを終ることゝした。斯て暗を衝いて一路土浦へ自動車を走らせ、六時三十四分土浦驛發、八時十一分上野驛着歸京、即時解散した。思へば忙しい旅行であつたが各所共に好意の接待を受け、有益なる見學に史叢を肥し得たことを深く感謝する。(西原俊二記)